

(2)薬物使用者の健康支援に必要な支援ツールと資源の検討

研究分担者：大木 幸子(杏林大学保健学部看護学科)

研究協力者：生島 嗣(特定非営利活動法人ぶれいす東京)

研究 要 旨

本研究では、本邦における「ハームリダクション」がどのように取り上げられてきたか、その経年推移と現状を明らかにすることを目的として、文献による検討を行った。方法は、Web 版医学中央雑誌を用いて、検索ワード「(ハームリダクション) and ((公衆衛生) or (健康) or (物質使用) or (嗜癖))」により文献を検索し、ハンドサーチにより文献を追加した。その結果、484 件の文献が抽出され、内容を検討し、429 件を分析対象とした。経年推移では、2005 年の HIV 感染予防を目的に海外で取り組まれていた注射器交換等のハームリダクションアプローチを紹介した会議録(学会発表)2 件が最初の報告であった。翌 2006 年には、総説としてハームリダクションの概念および海外でのプログラムの紹介がなされている。その後、2016 年に飛躍的に報告数が増加し、以後報告が続いている。次に 2023 年から 2025 年の原著論文、総説、解説、66 件の報告内容について検討した。報告テーマは、海外の活動紹介、アディクションへの対策・支援の転換としてのハームリダクションの解説、ハームリダクションを基盤とした依存症へのアプローチの解説、依存症治療の解説の中でのハームリダクションの紹介、治療機関・支援機関による活動報告、事例・症例報告、当事者活動、刑事政策上の問題を論じた報告、ハームリダクションの課題、研究動向、ハームの内容検討、ハームリダクションの効果検証、ハームリダクションの社会政策、包括的な支援などであった。

近年、国内での報告が増え、実践報告もみられるなど、ハームリダクションへの注目が高まっているといえる。しかし報告内容は、依存症治療でのハームリダクションという文脈が中心である。薬物使用にかかわる当事者の健康を支える生活支援にとっての「ハーム」とその回避のために求められる支援や方策の検討は、喫緊の課題であると考えられた。

A 研究目的

我が国は、アルコール依存症や薬物依存症をはじめとする物質使用障害に対するアプローチとして、断酒・断薬をとり、予防対策としては「ダメ！ゼッタイ！」を唯一の方策としてきた。また物質使用障害による健康問題への支援については、違法薬物の使用・所持違反として刑罰と精神科医療が、対策の中核となってきた面は否めない。しかし近年、本邦においてももう一つの方策としての「ハームリダクション」が取り上げられてきた。国際ハームリダクション協会は、ハームリダクションとは「合法、違法にかかわらず、精神作用薬物について、必ずしもその使用量はへることがなく

とも、その使用により生じる健康、社会、法的な悪影響を減少させることを主たる目的とする政策、プログラム、実践をいう」¹⁾と定義している。また「『ハーム』とは、精神作用物質使用による害を指し、リダクションとは精神作用物質使用そのものの使用を減少させることではなく、害を減らすことを指す」としている。そして、「ハームリダクション」は、当事者の健康問題をより低減しようとする公衆衛生学、医学、心理学における介入であり、公衆衛生、医療、カウンセリング、その他の支援を個別にカスタマイズする、当事者の人権擁護に立脚したアプローチである²⁾。

本研究では、3 年の研究期間をとおして、薬物使用経験のある HIV 陽性の者の包括的な健康への支援方

策を検討することを目指している。具体的には、薬物使用に関する幅広い状況を対象として、薬物使用にあたってより健康で安全に生活するために有効であった、あるいは使用障害から回復に至る過程で有効であった、または必要とした支援ツールを、当事者の経験から明らかにすることを目的としている。

そこで、初年度は、国内において「ハームリダクション」がどのように取り上げられてきたかを文献的に検討した。

B 研究方法

Web 版医学中央雑誌を用いて、20025 年までのハームリダクション関連文献を調べた。検索ワードは、「(ハームリダクション) and ((公衆衛生) or (健康) or (物質使用) or (嗜癖))」である。さらにハンドサーチにより文献を追加した。

次に検索された文献の内容を検討し、物質使用や嗜癖問題に関連する文献を絞り、年次的な報告の動向を検討した。

分析にあたっては、報告種別を原著、総説、解説、会議録(学会報告)、その他、にわけた。また対象事象は、アルコール、たばこ、薬物、物質使用症全般、行動嗜癖、アディクション全般、HIV 感染予防に分類した。

さらに直近の 3 年である 2022 年から 2025 年まで

に報告された文献のうち原著、総説、解説について、具体的な記述内容を整理した。

C 研究結果

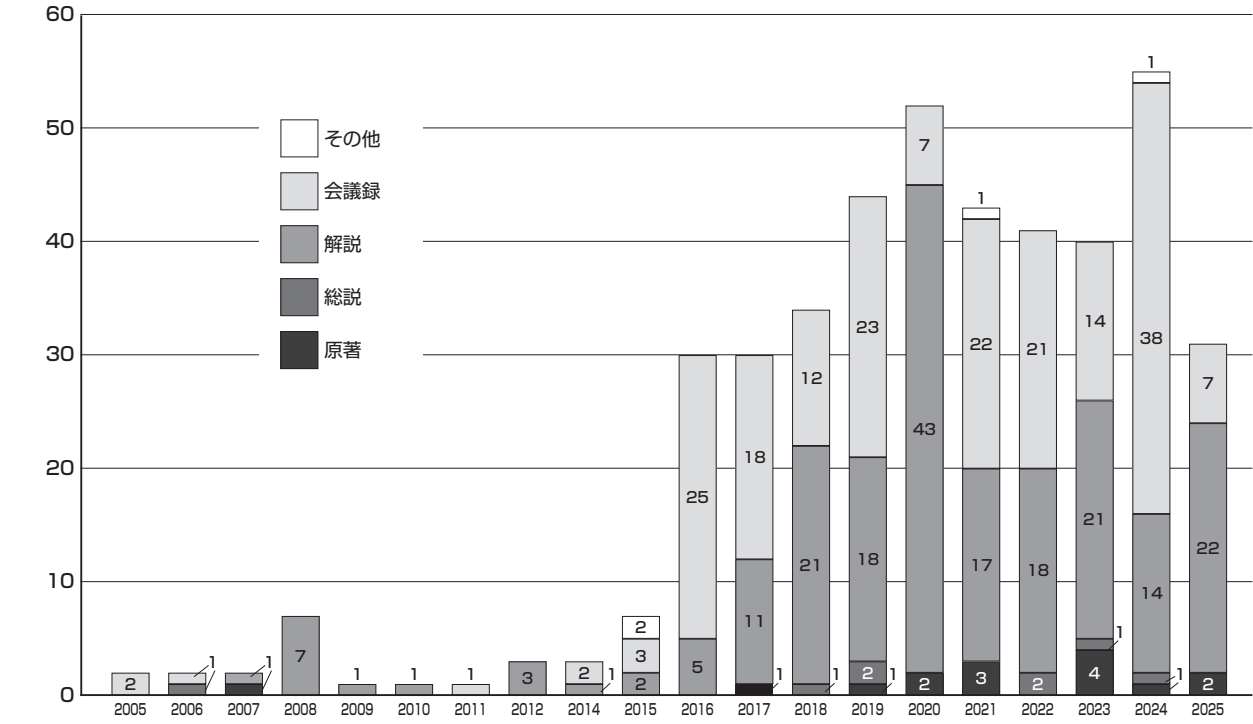
(1)文献抽出結果

上記の方法によって抽出された文献は、484 件であった。内容を検討し、429 件を分析対象とした。除外した文献は、職場での使用薬物の危害低減に関する産業保健領域のもの、事故予防のもの、主たるテーマがハームリダクション以外のもの等であった。

(2)年次的な報告動向

分析対象とした全期間の報告種別は、原著論文で 15 件(3.5%)、総説 8 件(1.9%)、解説 206 件(48.0%)、会議録で 196 件(45.7%)、その他で 4 件(0.9%)であった(図 2. 1)。抽出された国内文献で最初の報告は、2005 年にハームリダクションを取り上げた会議録(学会発表) 2 件であった³⁾⁴⁾。いずれも注射使用に伴う HIV 感染予防としての海外で取り組まれていた注射器交換等のハームリダクションアプローチの紹介であった。これらの報告は、厚生科学研究費補助によるエイズ対策研究の中で取り組まれたものであった。翌 2006 年には、総説としてハームリダクションの概念および海外でのプログラムの紹介がなされている⁵⁾。

図 2.1 HR 関連文献の報告推移



今回抽出された文献の中では、ハームリダクションについての体系的な紹介がなされたのは、本報告が最初であった。

その後、2016年に飛躍的に報告数が増加している。報告種別では会議録が30件中25件を占めていた。これらの報告のうちの多くは、専門学会でのハームリダクションをテーマとしたセッションによるものであった。報告内容は、ハームリダクションの概念の紹介、海外でのハームリダクションの取り組みの紹介、物質使用障害の治療への導入であった。その後も継続して、年間30件以上の報告数がみられている。特に2020年には、全報告数53件と多く、解説が44件を占めていた。それらの解説としての報告には、複数の医学系雑誌および社会福祉系雑誌において、ハームリダクションをテーマとした特集での報告が多く含まれていた。報告内容では、アディクション治療のハームリダクションへの転換、内科等のプライマリー治療でのハームリダクションの導入が論じられている。

原著論文は、2007年に1件あったが、次の報告は2017年である。その後は、2018年、2022年を除き、毎年報告がなされている。

各報告の対象事象は、アルコールで162件(37.8%)、たばこで44件(10.3%)、薬物74件(17.2%)、物質使用症全般で84件(19.6%)、行動嗜癖で21件(4.9%)、アディクション全般で38件(8.9%)、HIV感染で6件(1.4%)であった。これらの報告で、最初に取り上げられたのはたばこであった。その後アルコール、薬物、物質使用症全般で取り上

げられている。また、2018年以降はギャンブルゲーム等の行動嗜癖の報告がみられている。原著論文の対象事象は、アルコール6件、たばこ2件、薬物2件、物質使用症3件、行動嗜癖1件であった。

(3) 2023年から2025年の報告内容の分析

2023年から2025年の原著論文、総説、解説は、66件であった(表2.1)。

対象論文のテーマは、海外の取り組みの紹介で6件(9.1%)、アディクションへの対策・支援の転換としてのハームリダクションの解説10件(15.2%)、ハームリダクションを基盤とした「ハームリダクションアプローチ」の解説12件(18.2%)、依存症治療の一つとしてハームリダクションの紹介12(18.2%)であった。また実践報告では、治療機関・支援機関による活動報告7件(10.6%)、事例・症例報告3件(4.5%)、当事者活動3件(4.5%)であった。その他には、刑事政策上の問題との関係でハームリダクションを論じた報告3件(4.5%)、ハームリダクションの課題2件(3.0%)、研究動向1件、ハームの内容検討3件(4.5%)、ハームリダクションの効果評価、ハームリダクションのための社会政策の必要性を論じた報告、「生きづらさ」への包括的な支援方法のひとつとしての報告で各1件(1.5%)であった。

ハームリダクションを紹介した報告を対象事象でみると、対策や支援の転換としてハームリダクションを紹介した報告では、アルコール1件、たばこ1件、薬物2件、物質使用1件、アディクション全般6件

表 2.1 2023～2024 文献の報告内容(原著、総説、解説)

		海外の 取り組み	対策・ 支援の 転換	HR アプローチ の解説	治療方策 の一つ としての 紹介	実践報告			刑事政策 の問題点	HRの 課題	研究 動向	ハーム 内容の 検討	HRの 効果評価	HR 政策	包括的 支援の 一つとし ての解説	総計
						医療・ 支援機関 での実践 活動報告	事例・ 症例報告	当事者 活動								
総計		6	10	12	12	7	3	3	3	2	1	3	1	2	1	66
割合(%)		9.1	15.2	18.2	18.2	10.6	4.5	4.5	4.5	3.0	1.5	4.5	1.5	3.0	1.5	100.0
報 告 年	2023	3	3	7	4	3	1		2			2		1		26
	2024	1	4	2	3	2		1		2	1					16
	2025	2	3	3	5	2	2	2	1			1	1	1	1	24
対 象 事 象	アルコール		1	6	8	4	1			1		2	1			24
	たばこ		1		1											2
	薬物	2	1	4	1	2	2	2	3					1	1	19
	物質使用症全般	3	1		1			1		1				1		8
	行為嗜癖			1	1	1						1				4
	アディクション全般	1	6	1							1					9

であった。ハームリダクションアプローチの紹介では、アルコール6件、薬物4件、行動嗜癖1件であった。治療方策の一つとしてハームリダクションを紹介した報告では、アルコール8件、たばこ、薬物、物質使用、アディクション全般で各1件であった。医療機関・支援機関による実践報告および事例・症例の報告では、アルコール5件、薬物4件、行動嗜癖1件であった。

これらの報告でハームリダクションの意義も論述されており、その内容は、治療アクセスと継続のしやすさ、患者との治療関係の構築といった臨床的意義、スティグマの払拭、当事者の主体による人権擁護としての意義が語られていた。

一方で、ハームリダクションの課題の指摘の内容は、安易にハームリダクションを取り入れることで、治療の第一選択肢である断酒・断薬がなされないという指摘、減酒対策により患者の家族の困難が解決されないとの指摘であった。

また、対象事象による「ハーム(危害)」に関する研究3件は、アルコールによる「ハーム」の抽出が2件、行動嗜癖(ゲーム依存)の「ハーム」の測定尺度開発が1件であった。これらの報告からは、当事者の孤立や自分への否定的感情などの「生きづらさ」である「ハーム」に焦点をあてた支援の重要性が示唆されていた。

D 考察

本邦においては、2000年代前半にハームリダクションが保健医療領域で取り上げられるようになったが、当初は注射器によるHIV感染予防対策としての文脈での海外での対策の紹介であり、限定的な内容であったといえる。ただし、HIV感染症の治療が開発される前の当時の状況では、注射器の使用でのHIV感染はより深刻な問題であったものの、国内での十分な議論には発展しなかったといえる。

その後、報告数の増えた2016年以降は、海外での包括的なハームリダクションの取り組みが紹介されるとともに、依存症治療の転換という文脈での紹介が多くなされている。そうしたパラダイムシフトの提言を受け、ハーム(危害)を低減する意義をふまえた実践報告がなされるようになったと考えられる。

しかし、これらの報告は、依存症に対する精神保健あるいは精神科医療やアルコール性肝疾患に対する内

科診療における取組としての報告が主である。すなわち、依存症への従来の治療の困難さから治療アクセスや継続の障害の低減という枠組みでの報告が多くを占めていた。とりわけアルコールやタバコ、医療用麻薬の使用障害については、そうした報告が中心であった。一方、薬物使用については、これまでの治療の困難の背景として、厳罰主義が社会的スティグマ、さらにセルフスティグマ、そして孤立を招き、より生きづらい状況に陥ることを指摘し、「生きづらさ」に焦点をあてた当事者の人権擁護の視点を強調する報告がなされている。

以上のように近年、ハームリダクションの報告数が増えており、実装展開が進んできていると考えられる。しかし、疾病概念を前提とした治療として位置づけられた報告が中心である面は否めない。とりわけ薬物使用については厳罰主義的対策のもと、依存症治療の枠組みの外でのハームリダクションの実装は、非常に困難な状況にある⁶⁾⁷⁾。

しかし、WHOは、2014年に薬物問題を非犯罪化し、健康問題として扱うという指針を示した⁸⁾。さらに、薬物問題への支援として、包括的な支援の重要性を強調している⁹⁾。熊倉は、多様な困難を抱える人への支援として、医療へのアクセスと相談へのアクセスを保障する包括的な支援として、ハウジングファーストやハームリダクションを位置づけ、その重要性を指摘している¹⁰⁾。

薬物使用が当事者にとって自己治療であるとともに健康にかかわる問題であることを踏まえ、当事者の健康を支える生活支援としてとらえた上での当事者の「ハーム」とその回避のために求められる支援や方策の検討は、喫緊の課題であると考えられた。

E 結論

文献検討により、本邦におけるハームリダクションに関する報告状況を把握した。次年度は、本結果を踏まえて、薬物使用経験のあるHIV陽性者に健康な生活のために薬物使用にあたって有効であった支援やツール、あるいは必要であった支援について、インタビュー調査を行う予定である。

引用文献

- 1) International Harm Reduction Association :
What is harm reduction?
<https://hri.global/what-is-harm-reduction/>
(2026 年 3 月 19 日最終閲覧)
- 2) Patt Bening & Jeannle Little, Over the influence :The Harm Reduction Guide to Controlling Your Drug and Alcohol Use, Second Edition, The Guilford Press,2017, 松本俊彦; ハームリダクション実践ガイド 薬物とアルコールのある暮らし, 金剛出版 ,p16-18,2022.
- 3) 嶋根卓也, 吉田智子, 池上清子, 鎌倉光宏: イギリスにおける注射薬物使用者に対するエイズ対策について, 日本公衆衛生学会総会抄録集 ,64 回 p951,2005.
- 4) 吉田智子, 嶋根卓也, 池上清子: カナダにおける注射薬物使用者に対するエイズ対策について, 国際保健医療 ,20(Suppl). p73,2005.
- 5) 古藤吾郎, 嶋根 卓也, 吉田 智子, 三砂 ちづる: ハームリダクションと注射薬物使用 HIV/AIDS の時代に, 国際保健医療 , 21(3) p185, 2006.-
- 6) ことう ごろう :OD でも覚醒剤や大麻でも, 社会のウラ側で尊重されること ハームリダクション実践のはじまり・いま・これから, 精神療法増刊 12,p107-113,2025.
- 7) ことう ごろう: ハームリダクション東京の実践 この社会では、危なくて SOS なんて出せないよ., 精神看護 28(2),p108-112, 2025
- 8) United Nations Office on Drugs and Crime, World Health Organization, UN Women & International Network of People who Use Drugs. : Women who inject drugs and HIV: Addressing specific needs, Policy Brief, 2014, p. 8, 2014. https://www.unodc.org/documents/hivaids/publications/WOMEN_POLICY_BRIEF2014.pdf
(2026 年 3 月 19 日最終閲覧)
- 9) 4)WHO: Drug-Related Harm Reduction, <https://www.emro.who.int/asd/health-topics/drug-related-harm-reduction.html>
- 10) 熊倉陽介: 精神保健医療福祉のパラダイムシフト, 臨床心理学 25(4), P416-421,2025.

F 研究発表

なし

G 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし